九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

インタビュイーの応答途中におけるインタビュアーの発話についての一考察 ： テレビ番組のインタビューを対象として

陳, 力

https://doi.org/10.15017/1784630

出版情報：地球社会統合科学研究. 5, pp.55-64, 2016-09-30. 九州大学大学院地球社会統合科学府
バージョン：
権利関係：

『地球社会統合科学研究』5号 55～64
Integrated Sciences for Global Society Studies
No.5，pp. 55～64

インタビュイーの応答途中におけるインタビュアーの発話についての一考察
―テレビ番組のインタビューを対象として―

陳（チン）　力（リョク）

1．はじめに

インタビューは、基本的にインタビュアー（interviewer; 以後IR）とインタビュイー（interviewee; 以後IE）との間の相互行為である質問−応答の連鎖から構成される。これまで、会話分析の手法で多く分析されたニュース・インタビューにおける順番交替のシステムでは、IRは質問することしかできず、IEはその質問に答えることしかできないという制限がある。IRはIEに問いかけるが、常にオーディエンスに向けられたトークを生み出すこと、そしてIEの陳述や立場・意見に対して「中立主義的」スタンスを維持することという強い規範に従うことになる。例えば、IRはIEの応答に対して、'mhm' など受け止めのトークン（receipt tokens）[1]やあいづち[2]、頷きなど支持作業を抑制するのである。そうすることで、IRは自分がIEの語りを第一に聞いている存在であることを抑え、IEの語りの方向性をオーディエンスへと開いていくのである（Clayman, 2014; 好井, 2010; 山田, 2004）。次の例を見てみよう。

（1）Clayman（2014:633）

1　IR:　…Is : it your:view that the police should
2　　now be armed?
3　IE:　.hhh But definitely.
4　→.hhh　Ahm we: wuh- (.) we have no rights
5　　as a society .hh to expect to young men (.)
6　　.hh to enter situations where (.) the there is
7　　a fair: percentage, (.) of armed (.) people
8　　against them.
9　→It' s- it' s wrong: that they should-we should
10　　ask them .hhh to risk their lives, and to risk
11　　being shot,
12　→.hhh and the chances of th- of them meeting
13　　an armed: uh:m assailant is so much in-
14　　increase: .hh (.) that police should definitely
15　　be ar[med.
16　IR:　　[And you don' t worry that arming the
17　　police might actually…

IRによる質問（1−2行目）に対するIEの応答は、3行目から15行目にかけて、複数のターン（multi-turn）から構成されるが、IRはIEの応答が完全に終わる[3]まで発話権を取らないように控えているのである。

しかし、今まで会話分析の手法をあまり用いられていない、テレビ番組のインタビューにおける相互行為を観察してみると、ニュース・インタビューとは異なるIRの振る舞いが見られた。IEの応答に対して、まず、IRによる「はい」「うん」「ええ」といった実質的な内容を持たない継続促進語が使わるという現象が表われた。さらに、IEの応答途中においても、IRによる実質的な内容を持つ、短くかつ速く産出された発話が見られた。次の例を見てみよう。

（2）【>威信みたいなもの.<】
（（IEはYMOが世界中で有名になり、日本から発信された先兵役のような役割を負わされて非常にプレッシャーを感じたと話している））

1　IE:　あの::自分とひ-自分と比較すんのはちょっ
2　　と:.hhおこがましいですけども,まあ夏目
3　　漱石が昔,(0.7) 明治時代に,こう日本
4　　という,(1.0) あの:国家を背負って.
5　IR:→はい.
6　IE:　ロンドン留学:(0.3) したわけです
7　　[よね?>それ<] でまあ:.hhちょっと=
8　IR:→[はい.]
9　IE:　=精神的に落ち込んだりして.
10　　(0.6)
11　IE:　それを思い出しましたねなんか ˆ ねちょっ
12　　とそういうなんか.hhh (0.5) 個人でも
13　　ないなんでもないなんかこう_ (1.2) 国の:
14　　(0.5)
15　IR:→>威信みたいな[もの.]<
16　IE:　　[う(h)ん(h)HH.] もう(h)
17　　ちょっと(h)背(h)負(h)わ(h)さ(h)れ-背(h)負(h)

18　　われてる..hhそういう,なんか.(0.8) うう:ん.
19　　プレッシャーはありましたね.

まず、５、８行目の「はい」は、IRがIEに注意を向けていることを表示するとともに、そこまでの発話を問題なく聞き、理解したことを主張している（西阪, 2008）。そのため、IRはこれらの標識を用いて「続きを聞く用意ができている」ことを主張し、IEが次の成分を産出するのを支持することができる（串田, 2009）。このような現象は日常会話でよく見られる。テレビ番組のインタビューはインタビューの一種類であるが、ニュースを伝えることを目的とするフォーマルなニュース・インタビューとは異なり、日常会話のカジュアルな面も兼ねてテレビの前にいるオーディエンスを楽しませながら、メッセージを伝えることが主な目的である。そのため、テレビ番組のインタビューは日常会話とニュース・インタビューの間に位置付けられると言っても良いだろう。継続促進語についての研究は多くなされており、本稿ではこれ以上贅するまでもない。関心を持つのは15行目のようなIRの発話である。前述した通り、15行目のような発話はIEの応答途中に速く産出され、実質的な内容を持つものである。このような発話はなぜそこで産出されるのか。どのような役割を果たしているか。テレビ番組のインタビューという制度とどう関わっているのか。そして、それに対するIEの反応はどうなっているのかといった問いを明らかにしていきたい。

２．先行研究

語り手に対する聞き手の反応を相互行為の参与者たちにどう捉えられるか、またそれは語りの進行にどんな影響を及ぼすかという研究には、串田（1999, 2009）、Hayashi（2003）などが挙げられる。

２．１　「助け舟」と「お節介」

串田（1999）では、三人の会話者（語り手１人と聞き手２人）による物語り（storytelling）という相互行為における一つのディレンマについて論じている。それは他者に配慮を示したり、他者の手助けをしたりという行為が、ひとつ間違えば他者の自律的個人としての尊厳を脅かすことにもなりかねないというディレンマである。串田によれば、語り手は、フィラーによる言葉探しや質問調の抑揚による知識の承認の要請といった手続きを用い、物語りにおけるある不確かさを表示することがある。そこで、会話への参与の仕方や参与者の知識状態によって、「語り手＝知る者／聞き手１・聞き手２＝知らない者」という関係が、適切に「語り手＝知らない者／聞き手１・聞き手２＝知るもの」という関係へと切り替えられるならば、聞き手１と聞き手２による言葉の補充が「助け舟」になる。これに対して、「語り手＝知る者／聞き手１・聞き手２＝知らない者」という関係と、「語り手・聞き手１＝知るもの／聞き手２＝知らない者」という関係が適切に切り替わらず、むしろ二つのカテゴリー化がせめぎ合う形にやりとりが組織されるならば、後者の関係の中で教示する立場として適切な聞き手１の振る舞いは、前者の関係の中で聞き手２への「お節介」として構成される。

２．２　「聞き手による語りの進行促進」

串田（2009）は、会話の中で行われた聞き手が語りの進行を促進する手続きの組織を会話分析の視点から記述している。まず、「語り」という表現を「相互行為の中で複数の文や節を連ねて、自分の体験や誰かから聞いた出来事を描写する活動である」というように定義し、聴き手[4]は語りの途上でしばしば発話を行うと指摘している。串田によれば、聴き手の発話にはまず、そこまでの語りを①何らかの仕方で受け取る（知識を得たことを主張する、感想を述べる、コメントするなど）発話と、②受け取るうえでの問題を解決しようとする（言葉の意味を尋ねる、自分の理解を確かめる、補足説明を求めるなど）発話がある。特に注目されているのは、③語りを先に進めるよう働きかける発話である。このような発話をさらに分類すると、「継続支持」「継続催促」「継続試行」というカテゴリーが用いられる。「継続支持」には「継続支持標識」、つまり「うん」「はい」「ええ」などの継続促進語の使用及び「語り手継続開始[5]の反復」がある。次に、「継続催促」には、「非限定的継続催促」（継続標識「で」の使用と到達点反復）及び「限定的継続催促」[6]がある。最後に、「継続試行」とは、聴き手が「続きの出来事の候補」を試行的に提示する方法である。聴き手は、続きの出来事候補だと聞かれうる発話成分を試行提示することで、正しい場合には確認を与え、正しくない場合には正しい続きに置き換えるよう、語り手に求めることができる。

２．３　「日本語の会話における共同発話構造（Joint Utterance Construction）」

Hayashi（2003）によれば、日本語の会話において、現在の聞き手は進行中の発話ターンの投射可能性（projectability）[7]を利用し、進行中の発話と統語的に繋がる形でその続きを産出することによって、現在の話し手による発話を完結させるという現象がある。それは共-参与者による完了（co-participant completion）[8]と呼ばれ、(1)

共有視点の相互行為的達成[9](Interactive achievement of shared perspective[10])、(2) 相手の経験に対する共感的理解の差異的表示 (Differentiated displays of empathetic understanding of another's experience[11])、(3) 共有かつ独立的知識の提示 (Demonstrating shared yet independent knowledge[12])、(4) 介助説明 (Assisted explaining[13])、(5) 共-参与者による完了という形の応答提供 (Delivering a response in the form of co-participant completion[14]) といった活動を実践するためのリソースとなっている。さらに、それぞれのコンテクストで、共-参与者による完了と日本語の文法がどう関わるかについて記述されている。

以上の先行研究は、物語りや日常会話を分析対象としている。これらは、制度的場面で行われたインタビューとは異なる構造を持っているに違いない。さらに、インタビュー・トークの参加者はIRとIEの二人のみであるが、これらの先行研究では、二者会話だけでなく、多人数会話も扱われ、多人数会話にしか出てこない現象にも言及されている。従って本稿では、以上の先行研究を踏まえて、テレビ番組のインタビューにおけるIEの応答途中に産出されたIRの発話に着目し、会話分析の手法を用いて考察していく。

3．データ

本稿で検証したデータは、NHKの『100年インタビュー』という番組における、有名人を対象としたインタビューである。データは、NHKエンタープライズが販売しているDVDを9本購入し、そこから収集した。毎回一人のゲストが登場する90分ほどのインタビューであり、ゲストは様々な分野で活躍している専門家である。ホストはNHKのアナウンサーである。実際に使われている言葉の姿を厳密に示すため、データのトランスクリプトは、会話分析の分野における書き起こし記法の標準であるJefferson (2004) に準拠する。

4．分析

本稿で使用しているIEの「応答途中」というのは、その発話ターンが文法、韻律、行為のいずれかから見れば完結していない位置を指す。IRによる質問に対して、複数のターンにわたって一つのまとまった応答となる場合、その複数のターンの中の一つのターンの直後の位置は、ここで用いられている「応答途中」とは言えない。また、IEの応答途中にIRの発話が産出されることを可能にするのは、その位置で、何らかの理由によって、進行中の発話に一時的な滞りが生じているからである。IRがIEの発話に勝手に割り込んだわけではない。この二点を押さえた上で、分析を試みていく。

本節では、IEの応答途中におけるIRの発話を次の二つの状況から捉える。一つ目は、IEが応答をデザインするとき、言葉の産出にトラブルが起こった場合である。このようなIEの応答には言い淀みや沈黙、フィラーがよく現れる。そして、もう一つは、IEの言葉の産出には特にトラブルがない場合である。ただし、IEによる笑いや呼吸などによる短い間が生じることもある。前者を「言葉の産出問題への対処」と名付ける。後者を「切れ目の直後の利用」と呼ぶことにする。紙幅の関係上、全ての例を扱うことはできないため、代表性のある例だけをここで扱うことにした。

4．1　言葉の産出問題への対処

まず、本稿の最初に挙げた事例（2）に立ち返る。ここで再掲載する。

（2）【>威信みたいなもの.<】
((IEはYMOが世界中で有名になり、日本から発信された先兵役のような役割を負わされて非常にプレッシャーを感じたと話している))

1　IE:　あの::自分とひ-自分と比較すんのはちょっ
2　　と:.hhおこがましいですけども,まあ夏目
3　　漱石が昔,(0.7) 明治時代に,こう日本
4　　という,(1.0) あの:国家を背負って.
5　IR:→ はい.
6　IE:　ロンドン留学:(0.3) したわけです
7　　[よね?>それ<] でまあ:.hhちょっと=
8　IR:→ [はい.]
9　IE:　=精神的に落ち込んだりして.
10　　(0.6)
11　IE:　それを思い出しましたねなんか ^ ねちょっ
12　　とそういうなんか.hhh (0.5) 個人でも
13　　ないなんでもないなんかこう_ (1.2) 国の:
14　　(0.5)
15　IR:→ >威信みたいな[もの.]<
16　IE:　　[う(h)ん(h)HH.] もう(h)
17　　ちょっと(h)背(h)負(h)わ(h)さ(h)れ-背(h)負(h)
18　　われてる..hhそういう,なんか. (0.8) うう:ん.
19　　プレッシャーはありましたね.

11-13行目のIEの応答には、フィラーである「なんか」による言葉探しや0.5秒、1.2秒の沈黙が現れている。

また、13行目のターン末尾「国の:」が引き伸ばされ、続いて0.5秒の間が空いている。このような応答のデザインは、IEが適切な言葉をすぐに産出できないことを示唆している。そこで、IRは「>威信みたいなもの<」を速いスペードで言い出す。その発話は直前の応答と統語的に繋がっている。それに対して、IEは「うん」と承認を与え、さらにまた「威信みたいなもの」と統語的に繋がる形で話し続ける。このようにして、IEの言葉の産出問題は15行目のIRの発話によって解決されたと言える。

次に、もう一つの事例を見てみよう。

（3）【軽くしてくれる_】

((IEが進駐軍の病院に使役[15]のアルバイトに行った時に出会った面白い人について話している))

1　IE:　彼がいると, (0.5)なんか-(K)-今日は1日,
2　　(0.5)楽しいぞ?
3　IR:　ええ.
4　　(0.5)
5　IE:　あのつらい仕事も, (0.7) なんとか耐えていけるぞという思いになった. (0.4) .hh (0.2)
6　　だから, (0.6) そういうときに,こう人を_
7　　.hh (0.4) 笑わしてくれる人っていうのは
8　　ほんとにね; (0.7) あの:: (0.8) こう苦しみを_(0.6)こう(.)何ていうかな. (0.4)苦しみからこう(.) ° うん° (.)すくっ-助けてくれる
9　　[人という.]
10　IR:→ [°う:ん:°] (.) > 軽くして [くれる.<]
11　IE:　　[そうなん]-軽くし-軽くし-そうですね:: (0.6)そういう役割を持ってる.
12　　(0.4)
13　IR:　は[::い::]
14　IE:　　[必要なんです.]とっても (0.3) 必要な存在なんですね:
15　IR:　う:::ん.

9-12行目に見られるように、IEは「こう苦しみを」の次に0.6秒の間を置き、「何ていうかな」というフィラーを用い言葉探しを行おうとしたが、結局適切な言葉を産出できなかった。また0.4秒の間の後、「苦しみを」を「苦しみから」に置き換え、つっかえながら、「すくっ-助けてくれる人」という言葉を産出している。つまり、IEは言葉の産出のトラブルを対処するために、まず、フィラーによる言葉探しの手続きを使う。それでもトラブルが解消できないために、トラブルを起こした言葉自体を別の言葉に置き換えるという次の一手を使う。その一方、IRはIEの置き換えがそろそろ終わるだろうと思われる位置で、小さい音声で「°う:ん:°」(13行目) と言い出し、IEの発話末尾とオーバーラップしながら発話権を取り、続いて「苦しみを」の続きと取れるような発話「>軽くしてくれる.<」を速く産出する。このIRの発話に対して、IEはその言葉を２回も繰り返して強く肯定を示している (14-15行目)。また、IRによるこの発話はIEにとって「遅れた助け船」のように見えるかもしれないが、実はそれはIRがIE側の知識領域に踏み入る際にIEへの配慮を示していると考えられ、これは制度的状況における相互行為としての特徴の表れである。

以上の二つの事例は、いずれもIEのトラブルが順調に解決された場合である。逆に、解決に失敗した場合もある。次の事例（4）を見てみよう。

（4）【交通渋滞が,】

((アメリカの9.11事故が起こった後の話))

1　IE:　あの::よく日本だと, (0.3) あの:天皇陛下が
2　　(.) 亡くなったりすると, (0.4) あの:: (0.4)
3　　歌舞音曲 (h) 禁 (h) 止 (h) なん[て],
4　IR:　　[ええ]ええ
5　　すごいありま[す.]
6　IE:　　[そ]の自主規制したり,
7　IR:　[はい.]
8　IE:　[みんなで]規制したりするけども,.hh (0.3)
9　　アメリカ人はそういうのはまさかないと
10　　思ってたら,
11　IR:　ええ.
12　　(0.2)
13　IE:　やはりこう自然に, (0.3) .hh (0.3) 街から全
14　　然こう騒音 (0.3) その：(.) 車の (.) よく
15　　ニューヨークもひどく:(°で/え°)
16　　あの[::
17　IR:→　[>交通]渋滞が,<
18　IE:　ええ. (0.6) 鳴らしますけど車のね. (0.5)
19　　それも聞こえてこない,°もう°シーンと
20　　してるんですね.

この事例では、IEが9.11事件の後に、アメリカの街の様子について話している。13-16行目のIEの発話を細かく分析すれば、そこで言葉の産出のトラブルが何度も起こっていることがわかる。まず、「街から全然こう騒音」の次に、0.3秒の間と「その:」の後、「騒音」とは統語的な繋がりのない「車の」が産出されている。そし

て、「車の」の次にも、また統語的関係を持たない「よくニューヨークもひどく」という発話が産出されている。いずれも中途半端なまま、次へと進んでしまうように聞こえる。このような発話の組み立ては、IEが頭の中で言葉をきちんと整理していないためであろうと思われるが、そこでフィラーの使用や語尾の引き伸ばし、小さい間の置きが見られることは、IEが自分自身でも言葉の産出のトラブルを対処しようとしていることを示唆している。この点は事例（3）と共通していると言える。

しかし、13-16行目のIEの発話に対して、IRは「あの::」の引き伸ばしが始まるところ、つまり、話がまだ続く工夫が見られる時点で、「交通渋滞が」を産出している。このIRの発話には次のような特徴がある。まず、前述した事例（2）と（3）のような直前の発話と密接な統語的関係を持たない。そして、「が」で言い切られている。最後に、後に来る18行目のIEの発話からわかるように、「交通渋滞が」という発話はIEにとっての「助け舟」ではなく、むしろIRの推測が間違っていることを示している。つまり、そこでIEが言っているのはニューヨークの「クラクション」のことだが、IRは「交通渋滞」のことだと思い、発話している。

興味深いのは、18行目のIEの発話である。この発話は、直前のIRの発話は自分が言おうとする内容と食い違っているのにも関わらず、肯定的な態度を示す「ええ.」で一旦受け止めている。その後、0.6秒の間を置き、「クラクション」を明示的に言わず、その代わりに「クラクション」と結びつく動詞「鳴らす」を産出している。17行目の「交通渋滞が」と18行目の「ええ.」は一つのやり取りを構成し、あたかも13行目から20行目までのIEの応答に挿入されたかのように見える。このようなIEの発話のデザインは、やはりIRに対する配慮や協調的なスタンスを示している。

4. 2　切れ目の直後の利用

4.1では、IEによる応答が産出されている間に、言葉の産出のトラブルが起こった場合、IRはどの位置でどのようにして対処するかについて分析した。4.2では、IEの応答に産出のトラブルがない場合で、応答中の切れ目（IEによる笑いや呼吸などによって生じた短い間）の直後に、IRが直前のIEの発話の続きを産出する現象について分析していく。次の例を見てみよう。

（5）【>トクヤマ先生.<】
（(そういう言葉：バッハ、ベートーベン、モーツアルトなどの作曲家)）

1　IR:　でも小学校のときにそういう言葉を聞いた
2　　わけですね?
3　　(0.4)
4　IE:　>だから<その:作曲家になるとか作曲を勉
5　　強するっていうことが:. (0.5) 全くこう非現
6　　実的でね?
7　IR:　う::ん.
8　　(0.6)
9　IE:　うまくこう想像できないわけ[ですよ]ね:
10　IR:　　[はい.]
11　　(0.3)
12　IE:　で:(0.3) 自分がその-(.)(あんなの) できる
13　　とは思ってなかったし, .hh (1.2) (で)もう:
14　　(0.6) なん-なんのことかわかんないん
15　　だけど,まあかなり抵抗し (h) た (h) ん (h)
16　　ですけど,まあその.hh情熱的なHuh .h
17　IR:→ トクヤマ[先生.<
18　IE:　　[トクヤマ先生]はもう情熱的
19　　ですから, (0.6) 押しも強いで (h) す (h) し
20　　(h) (0.6) あの: (0.2) 無理やり連れていか
21　　れてですね.

この事例では、IEが小学生の時に有名な作曲家の名前を聞いたかどうかについて答えている。この断片の前では、IEが小学校1年からピアノのレッスンに通い、そのピアノの先生は「トクヤマ」という熱心な女性で、いろいろ影響を受けたという話がすでに語られている。これを前提に、12-21行目のやり取りを見ていこう。まず12-21行目のIEの応答には、4.1節で述べたようなフィラーによる言葉探しや言葉のつっかえは現れていない。IEの応答産出が順調に進んでいると言える。ただし、IEが16行目で「情熱的な」を産出した直後、笑い出して息を吸ってから続きを言おうとしている時点で、IRは素早く16行目の発話の続きである「>トクヤマ先生.<」を言い出す（17行目）。そして、IEはその発話の後半の位置から、「先生」とオーバーラップしながら、「トクヤマ先生はもう情熱的ですから」と言い出す。16行目でのIEの息の直後、IEは「ト」という音を発するための唇をしていることがビデオ画像で確認された。IEはこの位置で、自分の発話の続きを開始しかけたが、自分より一足先に相手の方がその続きを言い出したため、その相手の続きと自分の続きの間でオーバーラップが生じたのである。

ここまでの分析によると、17行目の発話は、4.1で検討した事例のようなIRに対する「助け船」ではなく、むしろIEと発話権を競合するような発話だと思われる。さらに言うと、IRはIEの応答産出の途中に侵入したか

のように見える。なぜなら、IEが自分側に関すること（IRにとってのB-event）に言及しているからである。つまり、それを語る権利はIEにあるのである。なぜここでIRは「積極的に」侵入し、かつ精確的にIEの発話の続きを言い出せるかと考えてみると、おそらくその理由は二つある。一つは、「トクヤマ先生」に関する情報はすでに二人の間で共有されているためである。もう一つは、IRがその共有知識を利用し、相手の発話に非常に取り組んでいる態度を示し、共通理解を示すためである。また、17行目の発話の産出速度が速いことから、IRは「侵入」の影響をできるだけ小さいように作る工夫をしていると考えられる。

続いて、もう一つの事例を見てみよう。

（6）【>（あっ）急に思い出す.<】
（（IEは経営者としてのこころがけについて話している。））

1　IR:　（略）これはどういう－どういうことですか？
2　IE:　いや要するに,（（咳））その:（0.4）その:::常に
3　　^ね,（0.4）その:um:（0.3）まあ例えば,.hh
4　　ええ:車に乗ってるときでもですね:あの:
5　　ラジオをかけっぱなしにしてると,.hh
6　　そうすると:（0.4）聞くでもなしになんと
7　　なしに耳に入って（0.2）
8　　[（　）]きてますよ[ね.]
9　IR:　[ええ.]　　[はい,]
10　　（0.2）
11　IE:　そうすると,あっ（0.5）というふうに思うこ
12　　とあるんですよ.（1.0）このあ－（あの）－あっ
13　　なるほどそうかとかね.（0.4）あどうして
14　　なんだとか,[と]いうこと.hhで,それは＝
15　IR:　　[ええ.]
16　IE:　＝そのままにしておくんですね.hh
17　　（0.2）
18　IE:　そうすると,（0.4）なのか－なにかの話の
19　　時に,.hhそれが役立ってくると.
20　　（0.2）
21　IR:→　>（あっ）急に[思い出す.]<
22　IE:　　[ええ.]（（唸り声））（.）
23　　思い出す.（.）[ってくると.]
24　IR:　　[ええ.]
25　IE:　別に,（.）.hh（.）その:ほんとはノートに
26　　でも取っとけばいいんでしょうけども,
27　　[そういうこと]をわたくしはしませんよね.
28　IR:　[ええ.]

事例（6）の直前でIEは、自分は販売や仕入れの経験を持っていないが、いろいろな情報を得るあるいはその変化に気づくための秘訣として、自分自身の中にフックを持つことを話した。その話しについての説明は、1行目のIRの質問によって要求されている。2行目からIEの応答が始まる。

注目するのは21行目の発話である。この発話は直前のIEの発話「それが役立ってくると.」と統語的に密接的に繋がっている。英語の「If X + Then Y」というような関係を構成しているのである。ただし、「If X」はIEによって産出され、「Then Y」は IRによって産出されており、両者の間に0.2秒というわずかな切れ目がある（20行目）。IRに産出されたYに対して、IEは承認を与えている（22-23行目）。言い換えれば、統語的知識の利用は、IEの応答の続きをIRによって正確に産出させることを可能にしている。また、IEの応答中に切れ目が生じたことは、IRによる発話開始を可能にしている。このような相互的なやり取りは、IRがこれまでのIEの発話を傾聴し、共通理解を達成しているという点で、事例（5）と共通している。

しかし、同じ状況で産出されたIRの発話が、連鎖上で消去されているように見られる場合もある。事例（7）を見ていこう。

（7）【弾いて楽しい.】

1　IE:　音楽もいろんな楽しみが:（0.2）ありますよ[ね.]
2　IR:　　[はい.]
3　IE:　楽しみ方が.
4　IR:　ありますねえ.
5　　（0.3）
6　IE:　え:,聞いても楽しいし:（.）[あの::h弾い]＝
7　IR:→　　[弾いて楽しい.]
8　IE:　＝ても楽しい人もいるし,　.hh（0.2）だけども::（.）s－もう少し.（.）ただ聴いてるだけ
9　　じゃなくて.（0.5）奥まで,それがそのきょ－音楽がどうやってできてるかっていうことを:（1.0）少し,し－深くまで
10　　知ると,もっと面白くなるというか:
11　IR:　うん.
12　　（0.5）
13　IE:　s:－そんな作曲家が:,どん－どんな,考えで.（0.9）こう音を配置していくのか↑ね.
14　　（0.5）少し,少しはこう垣間見たような
15　　気がするんっすそんときに.

この事例では、IEが音楽の楽しみ方について自分の意見を述べている。最初は音楽の楽しみ方にはいろいろあると主張している。７行目からの発話では、楽しみ方の例を挙げているように聞こえる。「聞いても楽しいし:」の次にわずかな間がある。その間の直後に、IRは「聞いても楽しいし:」の続きと聞こえる「弾いて楽しい.」を言い出したが、IEも同じ位置で自分の発話の続きを産出している。そこで、IEによる「あの::h弾い」とIRによる「弾いて楽しい.」とがオーバーラップしてしまう。さらに、９行目でIEは７行目と統語的に繋がる形で話しを続けている。このようなやり取りから見れば、まさに8行目の発話が連鎖上で消去されたかのように分析できる。ただし、ここで一つ言えるのは、IRはIEのこれまでの発話を内容・文法的に正しく理解した上で、８行目の発話を産出したということである。

５．考察

前章では、IEの応答途中におけるIRの発話を、IEの言葉の産出にトラブルがあるか否かという二つの状況から捉え、「言葉の産出問題への対処」と「切れ目の直後の利用」というカテゴリーを用い、それぞれ分析を行った。本章では、これまでの分析に基づき、このような発話はIEに対してだけでなく、テレビ番組のインタビュー・トークという相互行為にどんな働きかけをしたか、そしてテレビ番組のインタビューという制度との関わりについて次のように考察していく。

第一に、4.1節で述べたように、IEの応答に言い淀みや沈黙、フィラーが現れ、言葉の産出にトラブルが起こっている場合、IRはIEの応答途中に、「言葉の産出の問題への対処」としてIEの発話の続きを産出する。しかし、M. H. Goodwin & C. Goodwin（1986）によれば、「フィラーによる言葉探しは、多くの場合、自分の発話データがまだ継続することを示し、聴き手にターンを取らず引き続き自分の発話に注意を向けることを要請する。これに対する聴き手の適切な反応は、黙って次の言葉を待つか、あいづちによって注意を向けていることを示し、次の言葉を促すことである」（串田, 1999: 130）。そうすると、このようなIRの発話は不適切な行為だと解釈しても良いのではないかと思われる。一方、言葉探しに対して、他者が言葉を補うことが適切である場合もある。C. Goodwin（1987）によれば、「言葉探しが内部探索と外部探索という二つ通りの聞き取り可能性を持つ。この区別は視線や表情などの非言語的要素によって示され、内部探索として行われる言葉探しは、思案顔と中空に向けた視線、外部探索として行われる言葉探しは、特定の相手に向けた視線で行われる」（串田, 1999: 130）。これを例証するため、事例（2）の8-9行目の応答発話に伴うIEのジェスチャーや視線に注目してみよう。

（２）【威信みたいなもの.】

11　IE:　それを思い出しましたねなんか ^ ねちょっ
12　　とそういう / なんか.hhh (0.5) 個人でも
　　((こめかみに指を当てて思案顔になった))

　　((視線をやや下の方に向けている))
13　　ないなんでもないなんかこう /_ (1.2) 国の:
　　((IRに視線を向け始める))
14　　(0.5) ((IRに視線を向け始める))
15　IR:→ > 威信みたいな [もの.] <

ビデオ画像で確認すると、12行目の「なんか」からIEは思案顔をし、13行目の「なんかこう」まで視線をIRから逸らしているが、次の瞬間からIRの方を見続けている。まさに、ここでIEによる「内部探索」から「外部探索」への移行が行われ、その合図を受けたIRは15行目で発話を産出したわけである。上記のことは事例（３）と（４）でも同様だと言える。ただし、IEの「外部探索」に対して、IRの提供した「助け」は、IEの応答産出・インタビューの進行を促進した結果になれば、事例（４）のように妨げた結果にもなる。いずれにしても、IRはIEの発話に真剣に取り組み、IEはIRに協力的なスタンスを示すということが見てとれる。

第二に、4.2節で述べたように、IEの応答途中に言葉の産出のトラブルが起こっていなくても、IRは直前のIEの発話の続きを言い出すことがある。そうすると、IRはIEの発話に割り込んだかと思われるかもしれない。しかし、このようなIRの発話の開始時点に注意を向けると、応答中における任意の時点で開始するわけではなく、応答中における笑いや息などによって生じた切れ目の直後に開始することがわかる。あたかもIRはその切れ目の直後の位置を狙って発話を開始しているように見える。それに、直前のIEの発話の続きを正確に産出できるのは、これまでのIRの発話を十分に理解しているためではないかと思われる。まとめると、このようなIRの発話は、進行中のIEの応答に集中しつつ、IEの応答産出を妨げないように工夫しながら、統語的にも内容的にもIEの発話の続きを正確に言い出すことで、IEの発話への最高の理解を示している。ただし、IEの応答中の切れ目の直後の位置は、IE自身による続きが産出されても良い場所なので、IRがIEより一足先に発話を

開始すると、事例（5）と事例（6）のように、IRの発話の後半からオーバーラップが生じ、IEはIRの発話に承認を与え、繰り返しによって強く肯定する。もしIRもIEも同時に同じような続きを産出し、オーバーラップが生じた場合、事例（7）のように、IRの発話が連鎖的に消去されたように捉えられる。いずれにせよ、このようなIRの発話は、IRがIEの発話に即時に反応し、かつ十分な理解を提示することを表している。つまり、そこでIRは積極的な聞き手の役割を演じていると考えられる。

6．おわりに

本稿では、会話分析の手法を用い、有名人を対象としたインタビューにおいて、IEの応答途中におけるIRの発話について記述分析した。主に、IEの応答途中に言葉の産出の問題があるか否かという状況から捉え、「言葉の産出問題への対処」と「切れ目の直後の利用」というカテゴリーを用い、それぞれ実例を挙げて分析した。分析の結果として、まず、IRの発話は、IEの応答産出・インタビューの進行を促進させ、IEの発話への理解を提示するためにデザインされると言える。ただし、IRの予測によって産出された発話は、必ずしもIRが言おうとする続きだとは限らないため、インタビューの促進を妨げることもある。また、IRの発話は、それに対するIEの反応によって連鎖上の意味が異なってくる。いずれにしても、IEの応答産出におけるIRの発話は、インタビューに真剣に取り込み、積極的な聞き手であることを示唆している。それはテレビ番組のインタビューという制度的場面をより良く構築するために、重要な役割を果たしている。

記号一覧

(.)	0.2秒未満のわずかな無音区間
(秒数)	沈黙の秒数
.h	吸気音（「引き笑い」の音声も含む）
h	呼気音（笑い声も含む）
(h)	笑い声または帯気音
↑語↓句	音の高さに有標な上下がある場合
°語句°	小さい声で発音された語句
(語句)	聞き取りが確定できない語句
＜語句＞	周囲の語より、相対的に早く産出された語句
＞語句＜	周囲の語より、相対的に遅く産出された語句
語句	強勢の置かれた語句
語句.	下降音調で韻律的な切れ目がある場合
語句_	平板な音調で韻律的な切れ目がある場合
語句?	上昇する音調で韻律的な切れ目がある場合
語句,	すぐに言葉が続きそうな形で、韻律的な切れ目がある場合
語句-	産出しかけた言葉を途中で切った場合
語句:	音が引き伸ばされた場合
＝	無音区間が一切無く発話の産出が続いた場合
[	同時発話の開始点
]	同時発話の終了点
((語句))	文脈情報や非言語行動
→	その断片の分析において特に注目する行

---

1 日本語の場合、「ああ、そう」「はい」「おお」「本当？」などのトークンが挙げられる（山田, 2004）。

2 日本語学・日本語教育の分野ではあいづちと呼ばれるが、会話分析の分野では、「はい」、「うん」、「ええ」などを通常継続促進語（continuer）と呼ばれる。

3 ここで言う「完全に終わる」と判断する方法は、Schegloff（2011）、Clayman（2014）で指摘している。
"One method of marking completion that has been documented is the repetition of specific lexical items from the original question"（Clayman, 2014: 633）.

4 「聴き手」という呼び方は串田（2009）で用いられている。

5 継続開始とは、語りの次の成分が産出されうる連鎖的環境を予め用意する手続きのことである。継続開始には、語り手継続開始と聞き手継続開始がある（串田, 2009:15）。

6 自分が催促していることのカテゴリー名を挙げることで、次に何が語られるべきかを明確に限定する方法である（串田, 2009:19）。

7 「投射とは、進行中の言葉がその発話の統語的形状・種類・完了可能点を予示・予告することだ」（串田, 2006: 64）。「投射可能性」とは、「言葉に備わった投射を可能にする性質のこと」（串田, 2006: 53）である。

8 "Co -participant completion is also called 'anticipatory completion' in Lerner 1987, 1991, 1996a, 1996b.
Co-participant completion is a practice whereby a participant produces an utterance that is grammatically fitted to the ongoing trajectory of another participant's utterance-in-progress and which brings that other participant's utterance to completion"（Hayashi, 2003: 25）.

9 (1) ~ (5) は筆者が訳した。

[10] "The two participants have basically equal access to the event toward which a shared stance is negotiated through co-participant completion"(Hayashi, 2003: 36).

[11] "The first speaker engages in the activity of telling about his/her personal (past) experience, which in principle is only available to the person who experiences (or experienced) it. What the second speaker negotiates in this environment, then, is a display of a 'vicarious' understanding of someone else's specific experience which is essentially unavailable to him/her "(Hayashi, 2003: 36-37).

[12] "E.g., general facts"(Hayashi, 2003: 44).

[13] "This type of co-participant completion occurs in multi-party (i.e. more-than-two-party) conversation. And it is used to form a local alignment of two (or more) participants as an 'interactional team' vis-à-vis a third party… the second speaker uses co-participant completion to accomplish participation in the first speaker's explaining as a 'co-explainer', addressing the completing utterance to a third-party explainee"(Hayashi, 2003: 47).

[14] "The first speaker talks about some event to which the addressed recipient has more access and entitlement ('B-event')"(Hayashi, 2003: 56).

[15] 「使役」とは、旧軍隊で、任務以外の雑用をさせることである。

参考文献

Clayman, Steven E. (2014). *Conversation Analysis in the News Interview*. In Jack Sidnell and Tanya Stivers (Eds.) *Handbook of Conversation Analysis,* 630-656.

Clayman, Steven E. & Heritage, John. (2002). *The news Interview: Journalists and public figures on the air*. Cambridge, England: Cambridge University Press.

Goodwin, Charles. (1987). Forgetfulness as an Interactive Resource, *Social Psychology Quarterly 50* (2), 115-130.

Goodwin, Marjorie H. & Goodwin, Charles. (1986). Gesture and Co-participation in the Activity of Searching for a Word, *Semiotica 62* (1/2), 51-75.

Hayashi, Makoto. (2003). *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Heritage, John. (1985). Analyzing News Interviews: Aspects of the Production of Talk for an "Overhearing" Audience. In Teun van Dijk (Ed) *Handbook of Discourse Analysis,* Vol.3, Discourse and Dialogue, London, Academic Press, 95-117.

Heritage, John. (2013). Language and social institutions: The conversation analytic view, *Journal of Foreign Languages, 36* (4), 2-27

Jefferson, Gail. (1984). Notes on some orderliness of overlap onset. In V. D'Urso & P. Leonardi (Eds.), Discourse Analysis and Natural Rhetorics. Padua: Cleup Editore, 11-38.

Jefferson, Gail . (2004). Glossary of Transcript Symbols with an Introduction. In Gene H. Lerner (Ed.). *Conversation Analysis: Studies from the first generation*. Amsterdam &Philadelphia: John Benjamins: 12-23.

串田秀也 (1999)「助け船とお節介――会話における参与とカテゴリー化に関する一考察」, 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編),『会話分析への招待』, 京都: 世界思想社. 124-147

串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析――「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』,京都: 世界思想社.

串田秀也 (2009)「聴き手による語りの進行促進――継続支持・継続催促・継続試行」, Cognitive Studies, 16 (1), 12-23.

Schegloff, Emanuel. A., Jefferson, Gail & Sacks, Harvey (1974) A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation. *Language, 50* (4), 696-735.

Schegloff, Emanuel. A. (2011). Word repeats as unit ends. Discourse Studies, *13* (3), 367-380.

山田富秋 (1995)「会話分析の方法」『岩波講座現代社会学第3巻　他者・関係・コミュニケーション』, 岩波書店, 121-136.

山田富秋 (2004)「エスノメソドロジー・会話分析におけるメッセージ分析の方法」,『マス・コミュニケーション研究』64, 70-86.

好井欲明 (1999)「制度的状況の会話分析」, 好井裕明・山田富秋・西阪仰 (編),『会話分析への招待』, 京都: 世界思想社, 36-70.

好井裕明 (2010)「メディアに接する」,『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』,京都:世界思想社, 96-115.

An Analysis of Interviewers' Utterances initiated during Interviewees' Responses: Based on Data in TV Interviews

Ll CHEN

Our initial research highlighted that during TV interviews there are certain reactions from interviewers (IRs) towards interviewees (IEs)' responses that differ from those in news interviews. For instance, in news interviews IRs refrain from using any "receipt tokens" (e.g. "mhm") or supportive actions, such as producing "continuers" (e.g. "hai", "un", "ee", etc.) or nodding. Conversely, in TV interviews, during IEs' responses, IRs not only produce "continuers", which have no substantive contents, but also initiate short and quick utterances, which do have substantive contents. By using a conversation analytic method, this paper examines the reasons why IRs initiate these utterances during IEs' responses, how IRs' utterances function both in relation to the production of responses by IEs, as well as in the process of interviews, and how the distinctive institutional characteristics of TV interviews influence the interaction between IRs and IEs. We observe that IRs' utterances are indeed used to facilitate both the production of IEs' responses and the process of interviews, but that occasionally these utterances also hinder the process. In addition, IRs behave as active listeners who are highly involved in interviews and have a significant role in constructing TV interviews as a form of institutional discourse.